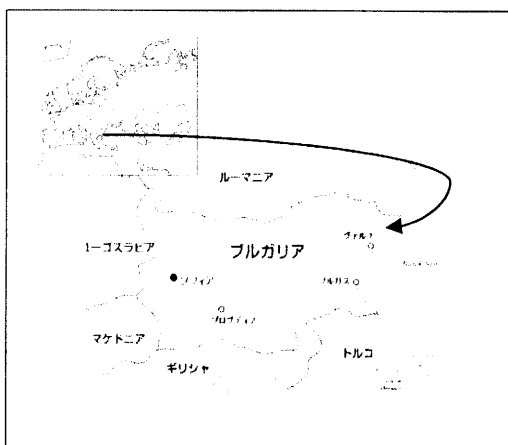


海外の現場における人的リソース活用を目指した試み —ブルガリアの大学赴任時の実践例から—

畠山 理恵

1. 赴任国の概要

ヨーロッパ南東に位置し、ルーマニア・ギリシア・トルコ・旧ユーゴスラビア諸国（現セルビア・モンテネグロ、マケドニア）などと国境を接する。日本の約三分の一の国土（面積約 110 万km²）に約 800 万人の人口を擁する。公用語ブルガリア語、首都ソフィア。1989 年に共産党政権が倒れ、民主化がスタートして以来すでに 10 年以上が経過しているが、未だ市場経済・資本主義社会への移行期にある。2007 年の EU 加盟を目指し、現在急ピッチで各方面の整備が進められている。



外務省ホームページ 各国・地域情勢 欧州 ブルガリア 「最近のブルガリア情勢と日本・ブルガリア関係」より

（注：地図上のユーゴスラビアは 2003 年 2 月 4 日付けでセルビア・モンテネグロとなった）

2. 日本語学習者、教師の概況

日本語教育が始まったのは 1968 年である。それ以前は日本関連の学問を志す人々は旧ソ連に留学していた。2004 年 7 月の時点で日本語講座を持つ学習機関数は高等教育 3、中等教育 3（うち 2 つは課外活動の扱い）、一般向け公開講座 1 で、学校教育制度内での実施が主流となっている。当然、教師も学習者もこれら機関のいずれかに属する人々となる

（若干、塾のような日本語教室もあると聞く）。

学習の動機は文化的な関心や日本語そのものへの関心からというものが圧倒的に多い。柔道や茶道をしていて言葉も学んでみたくになった、今まで学んできた外国語とかけ離れたものを学んでみようと思った、など。下は中等前教育に入る 12 歳から上は公開講座に通う 40 代まで 300 人強がそれぞれの機関で熱心に取り組んでいる。

一方の教師は、同 2004 年 7 月の時点で約 20 人を数える。ブルガリア人教師と邦人教師の割合はちょうど半分ずつである。邦人教師はすべて日本の何らかの派遣プログラムで来ている人々である。機関ごとに実情に合った・特色を持ったコースデザインがなされ、ブルガリア人教師と邦人教師が協同で運営にあたっている。

3. 送り出す側の期待

筆者は独立行政法人国際交流基金の派遣プログラムにより、2001 年 7 月から 2004 年 7 月までの 3 年間、日本語教育専門家として同国のソフィア大学に赴任した。同派遣プログラムは日本語普及・日本語教育支援事業の一環であり、「現地化」「自立化」をキーワードに、現地の関係者主導で築かれていく日本語教育をあくまで側面支援するという姿勢が近年より鮮明に打ち出されている。それを反映して、ここ数年、派遣ポストも以前のような大学などある一機関での業務を想定した「機関派遣」型から地域内の全機関を対象とし巡回しつつ支援を行う「アドバイザー」型へと転換が進んでいる。ソフィア大学はその数少なくなりつつある機関派遣型ポストのひとつであった。出発前・赴任中の幾多に及ぶ打ち合わせから、派遣専門家として期待されている役割を以下のように理解した。

- ・ソフィア大学での担当講座の遂行
- ・「現地化」「自立化」に向けて現地の関係者に

理解を求め協同で諸事に当たる

- ・「現地化」「自立化」促進の一環として学内・学外を問わずネットワークの形成に貢献する

4. 受け入れ側の期待

派遣先・ソフィア大学は国内最高峰の伝統ある国立総合大学で、ブルガリアにおける日本語教育のパイオニアである。古典および現代言語文学部東アジア言語文化学科日本セクションが所属先となった。日本セクションは日本学を専門とする学科であり、学生たちは日本語をはじめ言語学・文学・歴史・経済など包括的に日本について学んでいく。国際交流基金から派遣された日本語教育専門家は、ここで客員講師となり日本語コースを担当する。同日本セクションから派遣専門家に期待されていたことは

- ・ネイティブの教師として学生の日本語力伸長に貢献すると同時に高等教育にふさわしい高度な教育を実施する
- ・日本語コース全般をデザインし運営を支援する
- ・教室、職員室での日々の業務を成り立たせるため経済的援助をする（文房具の整備など）

であった。

5. 実践

5.1 リソースの洗い出しとプロジェクトの構想

日本にいれば、生まれ育った環境の中、すでに持つ人的物的基盤に大いに助けられつつ日々の教育実践を展開できるが、海外ではそうもいかない。教室を一步出れば異邦人の状態からなんとかして「これは使える」というものを入念な観察のもとにかき集め、得られた数的に決して豊富とは言えないリソースを、ひとつひとつ吟味し組み合わせでは「あるものを最大限に生かす。使えるものはどんどん使う。」とあの手この手で仕掛けていくしかない。

呻吟しつつ知恵を絞って種々の活動を考案していく過程は、創意工夫・応用課題の連続で決して容易ではない。ここが海外の現場に携わる者の苦労でもあり、醜態味でもある。

今回の赴任でも、それは派遣先の学内向けの業務・学外向けの国全体を視野に入れた業務すべてに通じていた。ここでは、赴任期間中筆者がどのようなリソースを把握し、それらをもとにどのような活動を行ってきたかの実践例を報告していく。赴任後の観察から把握したリソースは以下のようであった。

人的リソース：

派遣先および他機関の日本語教師など日本語教育関係者、派遣先機関の卒業生、学生、在住邦人、邦人旅行者など

物的リソース：

派遣先所蔵の日本や日本語に関する図書、筆者が個人的に購読している日本の新聞・雑誌、筆者所有の日本語教材、日本大使館広報文化センター所蔵の各種図書や視聴覚資料、日本大使館やJICA（Japan International Cooperation Agency、独立行政法人国際協力機構）の主催する日本関連の行事など

これらを観察した結果、人的リソース・特に日本語教育に携わる人々の質の高さに目を見張り、かつ、それが活かされていないことが気になった。他国と比べて少数派でも、教師も学習者もともにすばらしい資質を持っている。にもかかわらず、

- ①発揮できる機会が十分に作り出されていない
- ②個人でなんでも打開しようとし、あまり他の人とのつながりを持つとしない傾向が強く、元来の質の高さを他との協同によってさらにパワーアップし得る機会をみすみす逃している

もったいなさを強く感じた。①では、たとえば在住邦人にこんなにも能力の高い人たちが日本について熱く学んでいる実情があまり知られていない、日々の授業で学習者が主体的に作り出す場面があまりない、②では、派遣先の機関では学年を越えた交流がなく個々の学生が持つ貴重な経験の共有ができていない、ブルガリア人の教師たちが他機関の教師を知らない、などの状況があった。

機器や教材など「モノ」がないから学習・向上できないのではない。「自分たちこそが強力・有効なリソースになりうる」ことを学習者や教師の方々になんとか気づいてほしいと考えた。そこで、以下に列挙する活動を企画・運営・支援していった。（人的リソースを生かした試みのみ記述する）

表1 人的リソースを生かした実践一覧

学生間のつながりを作る
・全学年を対象とした交流パーティー開く ・全学生から自己紹介文を集め冊子を作って全員に配布する
豊かな経験を持つ学生がまわりに「おすそ分け」する機会・場を作る

<ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省日本語日本文化研修生として留学経験を持つ卒業生たちを招聘し、後輩たちにその経験を話す「留学報告セッション」を開く ・文部科学省日本語日本文化研修生を目指す学生を対象に「選抜試験対策コース」を課外に開設し、留学経験を持つ卒業生と筆者が組んで講師となり、いっしょに運営する ・新入生全員と2年生以上の有志でほぼ3人ずつのスタディーグループを作り、先輩が日本語学習をはじめとする大学生活全般の相談を受け後輩にアドバイスする「チューター制度」を行う
在住邦人に日本語を学ぶ学生たちの存在を知ってもらう
在住邦人のための親睦組織「ソフィア日本人会」広報誌に頻繁に投書し大学の授業の様子を伝えたり出講を呼びかけたりする、同会をはじめとする在住邦人の集まりにどんどん出て行くなど、日本語講座の存在を積極的にアピールする
在住邦人と学生との橋渡しをし、双方のニーズをつなぐ
在住邦人から持ち込まれる各種アルバイトの受付窓口となって求人があるたびに学生に公表し応募に向かわせる
在住邦人を授業のリソースに組み入れる
在住邦人の出講を組み入れた授業を行い、当日の運営はもちろん、事前の打ち合わせの段階から学生を交渉に参加させていく
授業当日にいたるまでのコース運営の多くの段階を学生に任せ、共同でやっていく
学生をコース運営の多くの部分に参加させシラバス作成や可能なら授業の計画や運営までをも任せる
学生の自主的な課外活動を支援する
学生の側から自主的に始まった「映画クラブ」「折り紙クラブ」の活動を支援する
機関の枠を超えた教師のつながりを構築し、維持し、支援する
<ul style="list-style-type: none"> ・日本語教師会を立ち上げ軌道に乗せる ・日本語教師会の活動を支援する
国内人的リソースの動向を把握する
可能な限り日本語講座を実施している他機関や、国内各地で青年海外協力隊員の開く日本関連のイベントに出向いて、教師や学習者から話を聞き、どの機関でどのような人々がどう活動しているかを常に把握しておく

次項 5.2 と 5.3 では、表 1 の下線をつけた部分、すなわち先述した難点を克服するべく①「高い資質を發揮できる機会を作ること」②「協同で事に当たる体制を立ち上げ、さらなるパワーアップ・レベルア

ップの基盤を作ること」を狙った試みにつき詳述する。

5.2 学生をコース運営の多くの段階に参加させる試み

赴任後しばらくは教師の側だけであれこれ準備し奔走していたが、ふと「学習者不在のままコースが進んでいる。学生に教室で何をどうしていくかについての意思決定の機会がない。今のままでは目の前に展開する講義がどのような狙いによるものかが学生に響かない。」と気づいた。加えて、すでに述べたような学生たちの持つ高い資質を信頼しコース運営に生かしたいという思いも強くなった。そこで、教師だけが把握していたコースの舞台裏を開示し共有して学生とともに意思決定をし、双方納得の上でコースを展開していけるように変えてみた。学年ごとにいくつか設定されている日本語関連の講義の中から、筆者が担当していたかつ導入可能と判断した講義を対象に、次のような手順でコースを進めた。具体的に変えたのはこれまで教師だけが行っていた次表 2 中*部分を学生との共同作業としたことである。

表 2 学生に多くの段階を委ねたコース運営の手順

<p>その学年の日本語関連科目全体をデザインする</p> <p>学生を意思決定の過程に参加させようとする講義を選ぶ</p> <p>コースガイドを作成し日本語コース全体および各講義の説明をする</p> <ul style="list-style-type: none"> * 該当の講義で必要なこと、やりたいことを出し合う * 取捨選択してシラバスを作成する * 講義に使いそうなものをさがしておく * リソースの中から講義に使いそうなものを選び出す * 授業計画をたてる * 授業計画をさらに検討し具体化する * 計画を調整しつつ実際に授業を運営する * 学期末に講義全体を振り返る <p>学年末に修了試験を作成し実施し評価する</p>
--

上記手順により実際の講義がどのように進んでいったかを、筆者の担当講義であった「3年生総合日本語演習」を例とし、協同で運営にあたった部分を段階別に説明していく。この講義は「日本語を手段として日本を学ぶ」ことを旨とし、ある特定の技能を強化するための他講義とは発想を逆転させ、持てる日本語の力を駆使して日本のさまざまな側面について学んでみようというものだった。

■該当の講義で必要なことやりたいことを出し合う
初回の講義で「日本の〇〇」「日本人の〇〇」の「〇〇」に当たる部分で取り上げるものを15提示した。アクセス可能なリソースが揃っていて進めていくのに無理がないと判断したものを出した。

■取捨選択してシラバスを作成する

15のトピックから話し合いで「住宅」「仕事に対する意識」「女性の生き方」など6-7つが選ばれた。ひとつのトピックに2回分の講義を充てることに決めた後、トピック別授業担当者を立候補により決定し、扱う順番を決めてシラバスができあがった。筆者から各担当者に「活動リスト用紙」を配り、授業でどんな活動をしていくか、現時点で考えられることを可能な限り多く記入して提出するように求めた。4技能のバランスはどうか・準備に無理がないかも配慮するように言い添えた。

■講義に使えるものをさがしておく

担当者には参考資料を渡し、目を通した上で使えるかどうかを判断する・それ以外にも活用できそうなものをさがしておくように指示した。

■リソースの中から使えるものを選び出す

授業本番に向けて各担当者は、もらった資料を読み込み活用の可能性を検討し、そのほか日本大使館に出かけて資料を探したり在住邦人でゲストになってくれそうな人を探したりなど身の回りのリソースに働きかけ、準備を進めていった。

■授業計画をたてる

担当が決定した時点で配布した「活動リスト」を数日後に回収しコメントをつけて返した。「聴解」と書いてあれば「何をどう聞くのか。単語の聞き取りにするのか、内容を大きくつかむために聞くのか」、「日本人を授業によぶ」とあれば「どんな人か。男性か女性か、働いている人かそうでない人か」などと問い、アイデアがより具体化されるように促した。

■授業計画をさらに検討し具体化する

担当者は前述の「活動リスト」からさらに詳細な授業計画を立て、それを携えて授業の3日から1週間前を目安に筆者と話し合いを持ち、何をどの順番でどうするか、授業の流れを具体的に作っていった。必要なハンドアウトその他の小道具は基本的に学生側で独自に準備したが、

日本語によるタイプアップその他自力でそろえるのが無理なものについては協力した。

■計画を調整しつつ実際に授業を運営する

授業当日は計画に基づき担当者主導で進んだ。筆者は1学生となって座り授業に参加した。ある日の授業を例にとると、「女性の生き方」第1回目の授業は「テーマの導入→ビデオを見て質問に答える→答え合わせをしビデオの内容をまとめる→日本女性のファッション、生き方、男女平等について説明→男性と女性の言葉遣いの違いについて説明→ある女性がこれまでの生き方を振り返っている文章を配る→CDを聞きながら空白の部分に単語を入れていく→完成した文章の読解→クラスで家庭内での男女の役割につきディスカッションする→宿題‘身近な女性の一日の生活を調べてくる’を出して終了」となっていた。

■学期末に講義全体を振り返る

最終回の講義で学生にアンケートを課して声を拾い、担当教師である筆者も内省した。

以上に述べたようなコース運営によって①学生にも学習に対する意向を表出し交渉する機会が生まれ②学生と担当教師が教室に関する情報を共有し今後どう進めていくかの合意に至った上でコースが始動し③コースを運営していく上で自分を含むクラス全体の学習の機会を担当者である学生自身が考案し作り出すという主体的な行動が不可欠となった。学生たちは準備の段階から当日の運営に至るまで期待以上の参加、貢献、奮闘を見せてくれ、当初の狙いであった「高い資質を発揮できる機会を作る」は十分に達成された。



日本のお客様とテーマ別小グループになってお互いの国のことを教えあう

5.3 ブルガリア日本語教師会発足ならびに始動後の活動支援

筆者の赴任以前にブルガリアには日本語教師のグループ「日本語教師連絡会議」が発足していたが、何度かこの会合に出席してみて①ブルガリア人教師の参加がない②日本大使館文化担当官主導の日本語関連の行事に向けた事務連絡のための会である③教師研鑽の場ではない、ことがわかった。また、この会議その他で顔を合わせる機会が度々あり、日本人教師間には機関を越えたつながりができているのに対し、ブルガリア人教師はそれぞれの機関で個人プレーをしているような印象を強く受けた。海外の、それも数的に規模の小さい教師群であればこそ、あるときにはまとまって「文殊の知恵」を出し合いお互いを磨くことは大切である。ブルガリア人も日本人もなければどの教育機関に属するかも問わずに、同じ国で働く日本語教師として日々の実践の中でぶつかる諸々のカベを持ち寄ってみんなで対策を練ったり、共通の課題を設定して勉強会を開いたりできないかと考えるようになった。先述したが、ブルガリアの人々は日本語教育の分野に限らず全般的にあまり協同で何かをすることを好まない。それを承知でわざわざまとまろうと働きかけるからには大義名分がどうしても必要であった。

あれこれ考えあぐねた末に、みんなが「出てよかった、ためになった」と満足するような教師のためのセミナーを開けないだろうか、まずはニーズを探ってみようとする国内の全教師を対象に関係各所の協力を得て「連絡会議」の名義でアンケートを実施した。テーマや研修内容、開催時期、招聘講師の希望や、ソフィア開催となった場合の必要経費などを尋ねたところ、「連絡会議」に出てくることのなかったブルガリア人教師たちから強い関心が寄せられた。ちょうどこの時期に前後して国際交流基金の公募プログラム「海外日本語教育ネットワーク形成助成」を活用しブルガリア日本語教師会を設立してはというアドバイスが日本側の複数の関係者から寄せられた。この機にブルガリア人教師を交えて日本語教師会を正式に誕生させ申請しては、というのである。関心を呼び起こしている今は絶好のチャンスと判断し、再び国内の全教師に向けて事情を説明し、設立の是非・会員となるかどうか・幹部としてブルガリア人教師の中からだれを推薦するか（日本人教師はすべて何らかの派遣プログラムで来ているためほぼ

2年周期で交代し定着しない）、を改めて問いかけ取りまとめた。その結果、全機関の全教師が設立と会員となることに賛同し、会長／副会長／会計の三役が選出され、2002年11月にブルガリア日本語教師会が正式に誕生した。

年が明けて翌2003年はブルガリア日本語教師会の実質的始動の年となった。春に初めての総会を開催し会員全員が顔を合わせた。それまで他機関の教師を知らなかったブルガリア人の先生たちが集まったのは画期的だった。秋には前年誕生後すぐに申請した「海外日本語教育ネットワーク形成助成」採用を得て、「第1回日本語教育セミナー」が開かれ、日本からの招聘講師を囲んで全ブルガリアの教師たちが机を並べ、ワークショップ形式の実り多い3日間を過ごした。教師会設立の大きな動機となったセミナーが現実のものとなって成功裏に開催され、幹部をはじめとする教師たちは大いに自信をつけた。



第1回日本語教育セミナー

さらに、当面の目標だったセミナーを実現させた教師会にうれしいおまげが待っていた。欧州他国からの注目である。ブルガリアに基盤ができたことが関心を引き、他国からセミナーへの参加申し込みや問い合わせ、ワークショップ共催のオファーが相次いで寄せられた。これらの中からある企画が進展し、翌2004年にブルガリアをホスト国とする「ACTFL OPI ワorkshop」「OPI 勉強会」が開催され、さらに同催しのために訪れた欧州他国の教師たちとブルガリアの教師たちとが「教師の悩みを話し合う会」を持ちざっくばらんに語りあった。これらの行事は会長の「ブルガリアの教師たちは社会経済状況の厳しさから自腹を切って他国へ出て行けない。しかし、自国開催にして他の国の方々をおよびすることができれば研修の機会が広がる。」という秀逸な

判断により実現した。

このように、ブルガリア日本語教師会は発足以降まだ2年弱の間に国内向け・国外と協同行事を開催・成功させて実績を積んでいる。いずれも個人の奮闘ではなし得ない大きな活動であり、他と協同して教師会を成しそこに所属することのメリットを内外ともに明確に示すことに成功していると言ってよいだろう。

筆者は、教師会立ち上げ以降の上記の変遷の中で「連絡係」となり、会員間の連絡や名簿作成、申請に関わる各種事務手続き、行事前後の事務全般など裏方業務を請け負って幹部の先生方を補佐してきた。「協同で事に当たる体制を立ち上げ、さらなるパワーアップ・レベルアップの基盤を作ること」は現地の教師たち、関係者とともこうして達成された。

6. まとめ

筆者は独立行政法人国際交流基金の派遣プログラムにより2001年7月より3年間、ブルガリアのソフィア大学に赴任した。かの地で得られるリソースの観察から、資質の高い人的リソースが強力な素材となることを発見し、これを生かすことを主眼に学内外ともに各種のプロジェクトを企画・運営・支援してきた。本稿ではそれらのプロジェクトのうち、「学生をコース運営の多くの部分に参加させる試み」「ブルガリア日本語教師会設立とそれ以後の活

動支援」を特に取り上げ、詳細に報告した。

派遣プログラムにより海外の現場に出ると、期間限定、すなわちずっとそこにいる人ではない立場からその地の日本語教育への貢献を求められる。現地の人々の手による現地の人々のための日本語教育が効果的に行われ維持されていくような基盤作りのために、そこに何があり、それらをどう動かし促していくべきかの丁寧な観察、適切な判断、柔軟な思考が求められているとも言えそうである。国や地域が違えば事情もまた異なる。ひとつの正解を追い求めるのではなく、可能な限り多くのアプローチ、チャンネルを持てるように視野を広げつつ実践を重ねていきたいと考える。

参考文献

外務省「最近のブルガリア情勢と日本・ブルガリア関係」(2005/5/9 アクセス)

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bulgaria/kankei.html>

島山理恵(2005)「学習者を巻き込んだ教室運営一試案～学習者主体の教室とは?～」『ヨーロッパ日本語教育報告・発表・研究論文集』第9号 ヨーロッパ日本語教師会 印刷中

島山理恵(2004)「ブルガリア・ソフィア大学総合報告書01年7月～04年7月」独立行政法人国際交流基金

はたけやま りえ／国際交流基金ニューデリー事務所